曲亭馬琴『敵討勝乗掛』翻刻

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学大学院教養デザイン研究科 公開日: 2020-09-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 神田, 正行 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/21087

【特集 うつ】

曲亭馬琴『敵討勝乗掛』翻刻

神田 正行

はじめに

昨年度、本研究科の金生谷達也氏が、『伊賀越物・又右衛門物の展開に見られる時代の欲望 ――歌舞伎『伊賀越道中双六』を軸にして――』によって、博士学位を授与された。金生谷氏が右の論考を、実り豊かなものとして完成されたのは、審査の末席に連なった稿者としても、大変に喜ばしいことである。

何度目かの口頭試問の最中、稿者はふと曲亭馬琴にも「伊賀越もの」の草双紙があることを思い出したのであるが、その場では題号を思い出すことができなかった。稿者が失念していた馬琴の「伊賀越もの」とは、黄表紙『銘正夢楊柳一腰』と『〔増補毬越〕登阪宝山道』（いずれも三巻十五丁。寛政五年・一七九三、仙鶴堂刊）、ならびに今回紹介する合巻『〔趣向伊賀越／版元和泉屋〕敵討勝乗掛』（文化十年・一八一三、甘泉堂刊）の三作品である。

右のうち、二つの黄表紙は一連の物語で、作者標記はともに「旡（无の誤）名子」であるが、馬琴は両書が自身の作であることを、作者評伝『近世物之本江戸作者部類』（天保四～五年）の中で明かしている。馬琴の黄表紙については、清田啓子氏や板坂則子氏によって、すでに大部分の翻刻紹介が備わる。しかし、作者自ら「書賈の誂へにて、その意にあらざる」（『作者部類』）と評し

た数点は、いまだ未翻刻のままであり、『銘正夢楊柳一腰』と『登阪宝山道』の二作も、その中に含まれる。

当初本稿では、右の三作品を一挙に紹介して、各々の比較対照にまで及びたいと考えたが、稿者の不手際ゆえに、今回は『敵討勝乗掛』一作のみの紹介となった。残された二点の黄表紙については、鮮明な書影が得られたのちに、本誌で翻刻したいと考えている。

『敵討勝乗掛』は、その題号にも暗示されているごとく、「伊賀越の仇討」に取材した歌舞伎『伊賀越乗掛合羽』（安永五年・一七七六初演）を翻案した作品である。

板坂則子氏「馬琴合巻における似顔絵使用役者一覧」（『曲亭馬琴の世界』所収。平成22年、笠間書院）によると、本作の挿画には、以下のような役者似顔絵が用いられている。

唐木政右衛門……三代坂東三津五郎
浮橋……五代瀬川菊之丞
二藍……二代沢村田之助
沢井又五郎……五代松本幸四郎
加田志津馬……沢村源之助
玉石武介……三代尾上菊五郎

本作刊行の二年前、文化八年五月に江戸市村座で上演された『乗掛合羽』においては、本作と同様に又五郎を幸四郎、政右衛門を三津五郎が演じている。伊原敏郎『歌舞伎年表』によると、この狂言は「はまり役にて申分なけれど、不入」のため、急遽「敵討」の場面を加えたが挽回できず、結局十二日限りで打ち切られたという。

原作の『伊賀越乗掛合羽』として、本稿においては新日本古典文学大系『上方歌舞伎集』（土田衛・河合真澄氏校注。平成10年、岩波書店）所収の初演台帳を用いた。ただし、『勝乗掛』の展開は、『乗掛合羽』の台帳よりも、実際の上演が反映された筋書本（狂言読本。新大系巻末附録）により近い。たとえば、本作における「蝦蟇村」は、筋書本に見える「般若坂癩（かったい）村」を模したものであろうが、初演台帳にはこの村が登場しないのである。「癩村」は、浄瑠璃化された『乗掛合羽』（天明三年・一七八三初演）にも現れるので、この演出は初演以来定着したものと思われる。

この他にも、『勝乗掛』と『乗掛合羽』との間には、注目すべき相違点が少なくない。その内のいくつかは、本稿の中にも指摘しておいたが、本作の独自性や、そこに込められた馬琴の意図などについては、稿を改めて検討することとしたい。

凡例

一、仮名は一部を除き現行のひらがなに統一した。また、会話を示す「　」や、句読・濁点などを適宜補った。

一、読み誤りのない範囲で漢字を宛てた。その際、もとの表記を傍訓で残したものもある。また、原本における振り仮名（小字双行の場合が多いが、稀に傍訓もある）は、一部を除いて省略した。

一、本文には、内容にもとづいて適宜段落を設けた。

一、挿絵は本文の近い位置に掲げ、画中の詞書は同じ頁の下段に翻字した。

一、「▼」印以下は、稿者による注記である。

一、影印ならびに翻刻の底本は、東京都立中央図書館加賀文庫蔵本（改装本。10181）である。虫損や着彩、シミなどが目立たないよう、画像には最低限の修正を施した。また翻刻に際しては、国立国会図書館・慶應義塾図書館所蔵の版本をも参照した。

一、本作中には差別的な表現が現れるが、作品の歴史性を考慮して、そのままとした。

《上冊　前表紙》

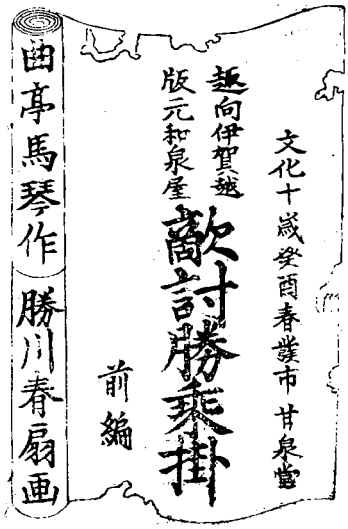
趣向伊賀越　酉春新板

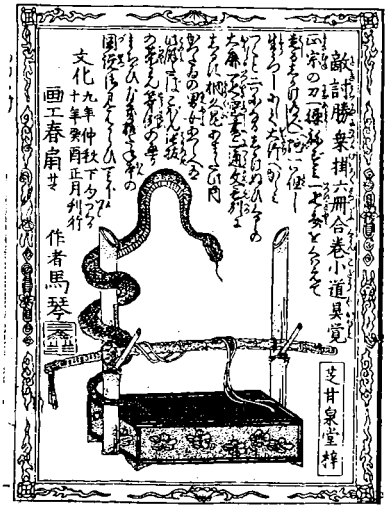
版元和泉屋

敵討勝乗掛前編　馬琴作　春扇画

▼描かれるのは、二十三丁裏と同一の場面。右は沢井又五郎、左は医師の伝茂庵（でもあん）。『乗掛合羽』初演時には、この医者殺しの場面を、浅尾為十郎が俗医者・又五郎の早替わりで演じた。

《前表紙見返し・一丁表》





（前表紙見返し）

文化十歳癸酉春発市　甘泉堂

趣向伊賀越

版元和泉屋　敵討勝乗掛

前編

曲亭馬琴作　勝川春扇画

※慶大蔵本による。

（一丁表）

敵討勝乗掛六冊合巻小道具覚　芝甘泉堂梓

正宗の刀一腰。鼠一疋、文を咥え走るしかけ有べし。蛇一つ、但し生写しにて、大竹へからみつくと二つになる仕掛け。縫ひぐるみの大鹿一疋。密書二通、文言別に記す。桐久毘あまた、此内かったるの男女あつらへ有。此余煙草盆、張抜の茶碗等、例の通り間違ひなき様、種本の図説御見計らひ可被下候。以上

文化　九年仲秋下旬作る
十年癸酉正月刊行

画工春扇サマ　作者馬琴　「印」（乾坤一艸亭）

《一丁裏・二丁表》

曲亭馬琴『敵討勝乗掛』翻刻

加田志津馬
唐木が長女　浮橋
墨田河　昔者不知　今社波
身乎浮橋廼　在世也兎　[印]（曲）[印]（亭）

兎犬俱斃而田夫取之　[印]（泉）
（兎犬　俱に斃れて　田夫　之を取る）

加田が若党　畑川丹右衛門

▼『乗掛合羽』に登場する上杉家の家老佐々木丹右衛門は、命がけで謀反を暴く。
桜江珍右衛門【▼本文中では「珍左衛門」】

《二丁裏・三丁表》

沢井亦五郎
加田が若党玉石碌助
武蔵野にありといふなる逃げ水の
　逃げ【▼「か」脱】くれても世を過ごす哉

▼源俊頼『散木奇歌集』所収の和歌。『夫木和歌抄』では、「にげ水、武蔵」の証歌として掲げられる。ただし両書とも、初句は「あづまぢに」。

唐木政右衛門
剣術の極意を問ば柳哉　雷水庵　印（曲）印（亭）
唐木が二女　二藍

（3ウ・4オ　志津馬・浮橋の婚約）

足利将軍家の時、管領仁木義長の家の子に、加田行家【▼原作『乗掛合羽』では渡辺行家】といふ侍あり。武芸を旨として、奉公第一の切り者なりき。妻は世を早くして、倅志津馬【▼史実の渡辺数馬】十八才になりぬ。これ又幼き時より、唐木流の剣術を稽古し、文の道にも疎からず、美麗の若者なり。家には譜代の若党、畑川丹右衛門、玉石武介といふ二人の若者、主に仕へて私なく、その家代々、五百貫の知行を給はりて、倹約を宗とした

行　（行家）その印籠は、山鳥の高蒔絵、唐木氏も見覚えあらん。主君より過ぎつる年、下し給ひし家の重宝。

志　（志津馬）すりや此印籠を二つに分けて、

行　浮橋殿へ当座の結入。

政　（政右衛門）善は急げと老人のお心遣ひ、娘お礼を申しやれさ。

うき　（浮橋）父さんそんなら志津馬様へ、

政　日柄を選み鎌倉より、又改めて嫁らするのじや。

政「存じがけなく種々の御馳走。此度は心も急げば、追つて上京いたす時、緩々お礼申でござらう。

政「時に御家来、何刻じやの。

（4ウ・5オ　供人足、政右衛門の発足を待つ）

りしかば、軍役の蓄へに乏しからず、家中一番の福者なりとて、人みな羨まぬ者なかりけり。

その頃鎌倉の管領、足利成氏公の家の子に、唐木政右衛門【▼史実の荒木又右衛門】といふ者あり。当時剣術の達人として、其名高き男なり。もとこの政右衛門は、都の出生にて、年いと若き頃は、仁木義長に仕へたりけるが、剣術次第に極意を極めて、世に肩を並ぶる者なきに及びて、鎌倉の管領成氏公、懇ろに懇望し給ひて、使者の往来度重なり、遂に仁木義長より乞ひ受けられし程に、唐木は妻子を伴ふて、鎌倉へ赴き、成氏公に仕へたり。しかるにこの政右衛門には、男子なくて娘二人有。

武（武助）「旦那衆はまだ暇がいりませう。さあ〳〵皆の衆、茶をあがれ〳〵。

（人足）「美しい嬢様を連れて戻るから、この位な事はありうちだ。

（人足）「違へねへ〳〵。

（人足）「たつ〳〵と言つてもたゝぬ物は、貧乏寺の本堂【▼「建つ」】と、搗きたてののし餅【▼「断つ」】、△／△長時化の帆柱【▼「立つ」】、長尻旦那の供待ち【▼「発つ」】だ。

姉を浮橋と名付けて十七才、妹を二藍と呼びて十六才になりぬ。姉娘浮橋は、幼き頃よりもとの主君、仁木殿の奥方に、宮仕へしてありしかば、親の唐木が鎌倉へ赴く折、「せめて娘一人をば残せかし」とて、奥方懇ろに留め給ふ故に、是非なく浮橋をば、都へ留め置きたりしに、既に三年の月日経ちて、次へ続く（3ウ・4オ）

／宮仕への年季も果てしかば、此度唐木政右衛門は、浮橋が迎ひとして都に上り、首尾よく娘が暇を給はり、鎌倉へ伴ひて、然るべき縁談を、調へんとぞ思ひける。

曲亭馬琴『敵討勝乗掛』翻刻

（5ウ　又五郎、行家に正宗を預ける）

かくてかの加田行家は、唐木が故朋輩といひ、加田が一子志津馬は政右衛門が、剣術の弟子にてありしかば、唐木すなはち、浮橋を同道して、行家が屋敷に至り、主親子に、浮橋を引あはせ、一別以後の物語などするに、主行家は、浮橋をつくゞと見て、「倅志津馬も、はや男になりたれども、いまだ縁談も調はず。幸ひ浮橋殿とは年頃もよし。曲げて此方の嫁に給はれかし」と、思ひ入て所望するにぞ、唐木も加田親子が事はよく知ったり、婿に取って不足なければ、早速に納得し、「いづれ一度浮橋を、鎌倉へ伴ひ帰り、妹二藍にも対面させ、改めて送り遣はすべし」と、言ふに行家大きに喜びつゝ、まづ婚姻のしるしとて、兼ねて志津馬に譲り与へし、山鳥の

（行家）「我ら方に有時は、いつなりとも返し申す。とかくに金子調達あって、買ひ戻しめされ。

（又五郎）「夜前盗賊忍び入って、殿より預かり置く、用金を盗み取られ、実に当惑いたしてござる。武士に似合はぬ払ひ物と、思し召しも気の毒ながら、亡き親どもとは懇意の貴殿、お見かけ申て此仕合はせ。面目もない売り証文、すなはち印形いたしてござる。

印籠を二つに分けさせ、下の二重を、浮橋に贈らせて、唐木親子をもてなしける。（4ウ・5オ）

こゝに又行家が、朋輩の若侍に、沢井又五郎【▼史実の河合又五郎】といふ者あり。彼が親伊太夫と行家とは、竹馬の友にて親類のごとく、睦ましくしたりしが、又五郎は、その心ざし親には似ず、心あくまでしぶとくて、力強く、剣術柔は人に優れて、常に武芸を鼻にかけて、人を直下に見下しければ、伊太夫亡くなりて後は、加田も昔の如くならず、又五郎も又、行家に疎遠なりしが、一人住みの事なれば、いつしか都六条の廓通ひに、数多の金銭を使ひ失ひ、家に伝はる武具馬具まで、残りなく売り代なせども、なほ廓通ひは止む事なし。今ははや重代の名刀、正宗の刀一腰になりぬ。さすがにこれを商人に、売らん事残念なれば、秘かに加田を語らふて、売らばや」と思ひしかば、その刀を携へて、行家が屋敷に赴き、様々なる偽りを述べて、金子百両に売り渡しけり。加田も、「此刀の事はよく知ったり」とて、「もし売るものならば、人手に渡させんよりは」と思ひて、早速金子を渡しける。（5ウ）

（巻二）

こゝに又鎌倉の管領、成氏の身内の侍に、桜江珍左衛門【▼史実の桜井半兵衛。『乗掛合羽』では桜田林左衛門】といふ者あり。剣術を言ひ立て、二百貫の知行を給はり、出頭して勤めたりけるに、京都仁木が家の子に、唐木政右衛門といふ者、剣術達人の聞こえあるによりて、成氏懇望し給ひて、既に召し抱へられしかば、桜江はいつとなく、主君の用ゐも薄くなり、弟子も次第に離れつゝ、大方は唐木が門人に成ぬ。珍左衛門は此事を、無念には思へども、所詮唐木と立ち合ひて、勝ちを取らん事覚束なし。「いかにもして成氏の心にかなひ、次へ続く（6オ）／前の続き初めの如く出頭せん」とて、秘かにそのたよりを窺ひしに、成氏の若君、袴着の祝儀あらんとて、その用意をせらるゝに、折節正宗の刀を求め給へども、心に適ふ物もなし。しかるに仁木義長の家の子たる、沢木又五郎はこの珍左衛門と、従兄弟どちなれば、沢井が家に、正宗の刀を所持する由を、兼ねてよく知るをもって、此由を、主君成氏へ申せしかば、成氏大きに喜び給ひ、「然らば汝都へ上りて、又五郎とやらんを語らひて、早速刀を差し上ぐるにおいては、仁木義長へ乞ひ受けて、かの又五郎を、召し抱へつかはすべし」とて、

路用かたの如く給はりしかば、珍左衛門は取る物も、取りあへず都へ上りて、又五郎に対面し、「今度件の刀を、差し出すにおいては、それがしが身の幸ひのみにあらず、和殿鎌倉へ召し出だされ、知行は思ふまゝなるべし」と、只木に餅のなる如く、言葉を飾りて勧めしかば、又五郎一議にも及ばず、早速承知はしたれども、彼の正宗をば、先だつて加田行家へ、百金に売り渡せし上は、今さら取り戻す手段はなけれども、さすがにかやう〳〵なりと、桜江へは言ひがたくて、まづ承知の挨拶し、「刀は後よ

曲亭馬琴『敵討勝乗掛』翻刻

（6オ　又五郎、珍左衛門を語らう）

り、それがし持参すべければ、一日も早く▲／▲たち帰りて、此段を、管領へ申し上、万事の取りなし頼み入る」とて、【▼「事も」脱カ】なげにもてなして、桜江をば鎌倉へ返し、様々に思案するに、「買い戻さんには金はなし。たゞ手短に、かの刀を盗み取り、鎌倉殿へ差し上げて、我が身の出世の蔓にせん」と、大悪心を起こしつゝ、ある夜加田が屋敷へ忍び入、主行家が、寝屋の床の間へ置きたりける、正宗の刀を盗み取らんとする時、行家目覚めてむつくと起き、やにはに取って引伏せて、灯火に、すかし見ればこはいかに、盗人は沢井なり。行家は誠ある老人にて、彼が親の事など思ひ出だしつゝ、さすがにこれを縛むるに忍びず、次へ（6ウ・7オ）／様々に教訓し、秘かに庭口より帰しけり。

又五郎は、すでにし損じたれども、いよ〳〵悪心を翻さず、行家がよく寝入りたらんと思ふ頃、再び塀を、乗

又（又五郎）「何事も拙者が胸に、委細承知してまかりある。時日を違へず後より持参、貴殿は先へ帰国せられよ。

珍（珍左衛門）「刀さへ差し上めされば、その身の出世は心のまゝ。必ず手筈を違へめさるな。

（6ウ・7オ　又五郎、正宗を奪い逃走）

り越えて忍び入、庭の飛び石を引かつぎて、主が寝屋に窺ひ寄り、件の石を落としかけて、行家を打殺し、つひに正宗の刀を、盗み取って走り出るにぞ、志津馬・丹右衛門等、物音に驚き覚め、あるひは主が変事に仰天し、あるひは曲者を追ふて、何処までもと追つかくる。中にも若党丹右衛門は、真つ先に進みつゝ、暗き方へと逃げ出づる、又五郎が右の袂の、後ろよりむづと取る、「取られてはかなはじ」と、振り払ひつゝ袖引ちぎり、行方も知れず逃げ失せたり。

さて火を灯して袖を見るに、又五郎が定紋あり。「さては敵は沢井なり」とて、志津馬主従打物取って、又五郎が屋敷へ押し寄する。

沢井はその夜の内に逐電し、彼が僕束平といふ者、旅立ちの用意して、たゞ今走り出でんとするを引捕らへ、厳しく又五郎が行方を責め問ふに、束平が懐中に密書あ

〈又五郎を追つかけ出づる、志津馬が手燭へ手裏剣うちかけ、走らんとする後ろより、丹右衛門が引止むる、袖ふり切つて逃げ失せたり。この所、始終無言の立まはりと見るべし。

▼画面左上、志津馬の名印が抜けている。

曲亭馬琴『敵討勝乗掛』翻刻

（7ウ・8オ　武介、ゐのはな婆と争う）

り、開き見れば、鎌倉なる桜江珍左衛門へ、遣はす書状にして、我が身の上を書き記し、「ひとまづ西国へ、身を隠して時節をうかゞひ、正宗の刀を持参して、鎌倉へ参るべし」とぞ書きたりける。志津馬主従これを見て、「さては敵の行方は知れたり。此奴が首を取って何にかはせん」とて、束平が、耳を削ぎて追ひ放し、主君仁木殿へ、敵討ちの暇を乞ひ受け、▲／▲若党玉石武介【▼『乗掛合羽』では、政右衛門の若党石留武助】には、「急ぎ鎌倉へ赴きて、事の為体を、唐木氏に告げ知らせよ。播磨路にて待ち合はさん」とて、これをば先へ出で立せ、

ゐ（ゐのはな婆）「俺に逢ふたが運の尽き。ひねり殺す、観念しや。

武（武介）「何やう、小癪な。

（左上。志津馬主従、束平を問い詰める）

（志津馬）「おのれ知らぬとて言はさで置かふか。

丹（丹右衛門）「サア又五郎が行方をぬかせ。びくともすると手は見せぬぞ。

つか（束平）「あゝ言ふと言ったら言ふはいの。手籠みになつたらしよ事がない。アイタ、、、、言ひます〳〵。

（8ウ・9オ　政右衛門、武介と対面）

志津馬は畑川丹右衛門、たゞ一人を召し連れて、又五郎が後を追つかけ、播州さして旅立けり。

○唐木政右衛門が惣領娘浮橋は、去んぬる頃、都帰りの折加田志津馬と、許嫁せられしかば、しるしの印籠を秘蔵して、「今日や迎への人や来る、明日は便りのある事か」と、心待ちのみせらるゝ程に、次へ続く（7ウ・

あ（二藍）「思ひがけない事ではある。

あ「姉様の本意なさを、思ひやるさへ傷ましい。

浮（浮橋）「とかくに心ゆるしがたきは、同家中なる珍左衛門。又五郎が、従兄弟といへば壁に耳。こりやどうしたらよかろうやら。

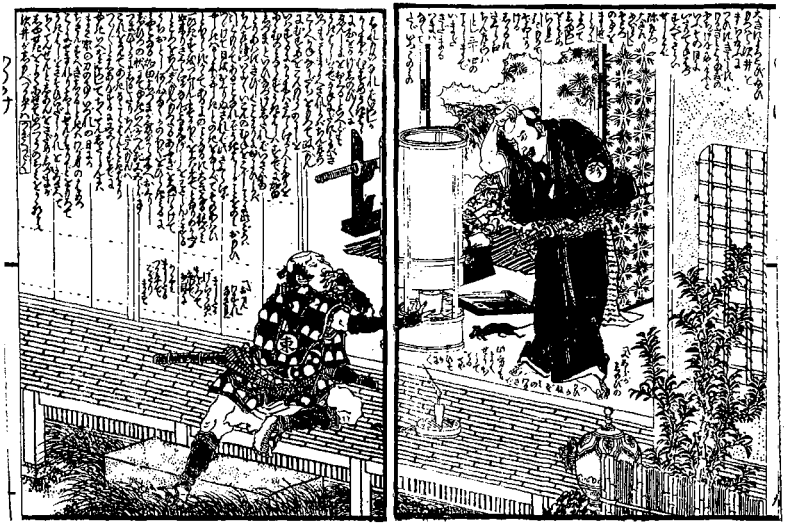
武（武介）「若旦那には、すでに敵打の願ひを上げ給ひ、近々発足▲／▲なさるゝつもり。御息女様の縁あれば、婿はすなはち子も同然。力を合はして敵沢井を、打取らせて給はらば、我々までの身の大慶。ひとへに頼み上げまする。

政（政右衛門）「我もさは思へども、事速やかに埒明かぬ、仕官の習ひ力及ばず。いづれ志津馬に鎌倉へ、忍びやかに来たられよと、言伝ておくりやれ。

8オ）／妹二藍に、志津馬が事を言ひ出て、待つに久しき日を送るに、思ひもかけず都より、加田が若党玉石武介飛脚に来て、沢井又五郎が悪行、行家が変死の事を、告げ知らせさて言ふやう、「それがし都を立ける日、田村川のあなたなる、とある田舎に宿りしに、此所は敵又五郎が乳母、ゐのはな婆が故郷にて、件の婆も、又五郎が事によりて、身に禍の、かゝる事もやと危ぶみつゝ、その日都を逐電して、逃げ帰りたるに行き会ふたり。『這奴は又五郎を、もり育て昨日までも、沢井が屋敷にありし者なり。引捕らへて詮議せば、敵の行方を知る由あらん』と、思へばやがて呼び止め、事のまことを尋ね問ふに、思ひの外なる悪婆にて、かへってそれがしを、『敵の片割れなり』と罵り、懐剣を引抜きて、無二無三に切つてかゝれば、やむ事を得ずしばらく戦ひ、ついに首を打落とし、事はじめの手土産に、持参して候」と述べ終はり、志津馬が書状とゐのはなが、首を取り出だして見せければ、浮橋が愁傷いふべくもあらず。政右衛門聞て眉をひそめ、「この婆を殺さずは、又五郎逐電するとも、必ずそこへ訪ね来て、身を寄する事もあらんに、武介ははかりごとをし損じたり。ゐのはな既に討たれぬと聞かば、敵はます〳〵遠く走りて、急にはありかを知りがたからん。しなしたり〳〵一と呟きつゝ、すぐに返事を書き認め、次の日武助を帰しけり。

○こゝに桜江珍左衛門は、去んぬる頃正宗の刀の事を、沢井又五郎に約束して、急ぎ鎌倉へたち帰り、件の刀は、ことに秘蔵の物なれば、主君仁木にしばらくの、身の暇を申受け、又五郎これを携へて、急ぎはせ参るべき由を申しければ、成氏「次へ続く」（8ウ・9オ）／大きに喜び給ひ、専ら沢井を、待ち給ふにつひに来たらず。若君袴着の日限、はや今日といふその日に至りて、手筈全て相違せしかば、珍左衛門大きに迷惑し、粗忽の事を申せし科によって、出仕を止められ、引籠りてゐたりける。

しかるに桜江珍左衛門は、年三十四の今年まで、いまだ定まる妻はなくて、たゞ色好みの痴れ者なれば、いつしか唐木が娘、浮橋に心をかけ、忍び〳〵に艶書を送るといへども、浮橋いかでか手に取るべき、いつも其まゝ返されしかば、珍左衛門堪へかねて、媒をもって政右衛門に、娘を懇望の由を言はするに、唐木は桜江が、人となりを憎むのみならず、浮橋は、すでに加田志津馬と許嫁したれば、いさゝかも取りあはず、厳しく断りに及びしかば、珍左衛門、いよ〳〵遺恨の胸を焦がし、殊に此頃は、引籠りてある事なれば、浮橋が事をのみ、思ひ続



（9ウ・10オ　束平、珍左衛門のもとへ至る）

けて日を送りぬ。

されば此桜江が屋敷は、唐木が屋敷と軒を並べて、その間遠からず。かくてある夜の事なるに、大きなる鼠一匹、巣を作らんとてか反故を咥えて、隣の方より出来り、桜江が納戸なる、長押を渡らんとする所を、珍左衛門持つたる扇を、投げかけて打ち落とし、何心なく、かの反故を開き見るに、都なる加田志津馬が方より、唐木へ送りし自筆の状にて、行家が変死、又五郎が事、詳らかに記したり。珍左衛門はこれを見て、呆るゝ事半刻ばかり、つく〳〵と思案するに、「又五郎既に行家を、殺して逐電したらんには、正宗の刀の事、いづれの日にか持参すべき。しかる時は、我が身の破滅こゝに迫れり。所詮謀をもつて、浮橋を誘ひ出だし、彼を携へて、逐電せん」と思案を定め、志津馬が手跡をよく似せて、一通の文を書く折から、沢井が僕、束平は、次へ続く（9ウ・10

（束平）「お見忘れなされましたか、下郎めは先だつて、京でお目にかゝりましたる、束平でござります。

（珍左衛門）「又五郎が忍びの使ひか。鼠の悪さで此方も、よく承知してをるてや。秘かに〳〵。

オ）／辛き命を助かりて、鎌倉へ逃げ来たり、又五郎が事の趣、志津馬が敵討ちに出る事まで、珍左衛門に告げしかば、珍左衛門は束平に、謀を囁きて、志津馬が使ひにいでたゝせ、かの偽文をもたらして、秘かに浮橋に渡せとて、唐木が屋敷へ遣はせしに、折もよく浮橋が腰元、木綿垂といふ女庭口にあり、束平やがて志津馬より、忍びの使ひと偽りて、件の文を渡せしかば、浮橋は、取る手遅しと開き見るに、まづ懐かしき、心の限りを哀れに述べ、「敵を尋ぬる旅の空は、いつを限りに帰るとも定めず、▲／▲あひ見ん事の難ければ、忍びて物を申さんため、駿河の黄瀬川まで下りぬ。秘かに家を抜け出でゝ、こなたへ来給へ、対面の上、言ふことあり一と書いたれば、恋しと思ふ男の玉章、心もいとゞ浮橋が、深き思案に及ばゞこそ、「早く志津馬に会はん」とて、木綿垂一人供にして、束平に案内させ、黄瀬川さして走りけり。恋は思案の外とはいへど、いと苦々しき事ども也。

（10ウ）

（10ウ　木綿垂、手紙を取り次ぐ）

曲亭馬琴『敵討勝乗掛』翻刻

束（束平）「志津馬様より忍びの使ひ。浮橋様へ上げて下され。旦那殿へ知らせまいぞや。

ゆ（木綿垂）「忍びのお使ひとあれば心得ました。木陰に隠れてゐさしやんせ。

束「承知々々。早くお返事を聞かせて下さい。

（巻三）

桜江珍左衛門は兼ねてより、逐電の用意して、秘かに諸道具を売り払ひ、みな金にして路用とし、「又五郎と一つになり、西国にて身を立てん」とて、その夕暮れに宿所を忍び出で、車田の松原にて、束平を待つ程に、浮橋は木綿垂もろ共、束平に導かれ、「早く志津馬に会はん」とて、箱根の方へ赴けば、思ひもかけぬ松陰より、珍左衛門現れ出で、「志津馬が文を偽筆して、そもじをおびき出せしは、いやでも応でも、次へ続く（11オ）／

（11オ　珍左衛門、浮橋を脅す）

行きかけの駄賃に連れて逃げる。さあ歩み給へ」と手を取れば、主を見真似に束平も、木綿垂を引捕らへ、髭むしやくしやなる頤　寄せて、頬ずりさるゝ臭さけ憎さ、払ひ退けても突き退けても、柳にまつはる鬼蔦に、引止められて詮方なく、浮橋は懐剣引抜き、珍左衛門に突きかくるを、叩き落として大に怒り、「とても心に従はずは、生けおいて人の花と、眺めさせんも妬ましい。ばら

束（束平）「此束平も旦那の相伴。下様は下様同士、ちょつと手付けに柔らかな、頬ずりほどの血の涙、落ちて性根【▼情事の相手】になりなさい／〳〵。

ゆ（木綿垂）「これ滅相な大騙り。いやらしい、そこ放しや。

浮（浮橋）「さては志津馬様の偽筆して、おびき出だせし珍左衛門。御身とても又五郎が、従兄弟といへば敵の片割れ。汚らはしい、そこ退きや。

珍（珍左衛門）「応と言へば駕籠に乗せて、こゝからすぐに連れて逃げる。いやと言へば、此だんびらがどてつ腹へ、ぐつさりとお見舞い申ス。色よい返事はどうだ／〳〵。

（11ウ・12オ　浮橋の臨終）

曲亭馬琴『敵討勝乗掛』翻刻

してくれん」と桜江が、朱鞘の刀抜く手も見せず、浮橋が肩先より、乳の上かけて斬り倒せば、「あはや」と驚く木綿垂が、声を限りに一生懸命、「人殺し〳〵」と、二声三声呼ばせも果てず、「音な立てそ」と束平が、だんびら抜いて斬り倒す、折から来たる人影に、桜江はとどめも刺ず、刀ののりをおし拭ひ、束平に目配せして、

（政右衛門）「げにも真つ赤な志津馬が偽筆。娘の敵は珍左衛門。ひと足違ふて残念々々。

浮（浮橋）「許嫁ても婚姻せぬ、男に会はんと親にも告げず、忍び出たる身の過ち。はかなく死出の山鳥の、長き別れに形見の印籠、二重はこゝに二世の縁、まことの妹に結ばして、一人赴く十万億土。草葉の陰から志津馬様の、めでたく敵討ちおほせ、栄え給ふを願ふのみ。とは言え一目男の顔を、わしや見て死たい、死にたいはいのふ。

あ（二藍）「今際の際まで夫の事、この二藍が事までも、言ひ残し給ふ姉様は、貞女の鏡、なまじいに、残る此身が疎ましい。

▼画面左上に、逃走する珍左衛門主従。

脇道よりぞ逃げ失せたり。

さる程に唐木政右衛門は、宿願の旨あつて、此日娘二藍を伴ひ、白幡明神へ参詣し、その夕暮れに家路へと、足弱を、急がしつゝ帰りしに、車田の松原に、斬られたる女二人あり、立ち寄り見ればこはいかに、一人は娘浮橋なり、今一人は、腰元木綿垂にてありしかば、親子は慌てふためきつゝ、様々に呼び生くるに、木綿垂は、急所をしたゝかに突かれたれば、五体既に冷え固まりぬ。

[次へ]（11ウ・12オ）／浮橋は胸の所、少し温かなりしかば、気付けを口に注ぎ入、介抱時を移すにぞ、浮橋やう〳〵生き出でゝ、父と妹を一目見て、はら〳〵と涙を流し、「面目なや父上・妹。月頃日頃恋しいと、思ふ男の玉章と、思ひ過ち桜江に、おびき出だされあまつさへ、あへない最期も我が身のいたづら。志津馬様より使ひは来るとも、親には告げず忍び出し、不孝の罪は天の責め。許嫁といふのみにて、添はで此まゝ死別れ、妹背の縁消え果てなば、父上も又志津馬様の、助太刀し給ふ縁もなし。しかればいとゞ覚束なき、夫の身の上黄泉路の障り。せめて妹を妾に替えて、志津馬様に娶せ給はゞ、やつぱり変はらぬ婿舅。世の中広く助太刀して、敵沢井を討たせてたべ。偏に願ひ上げまする」と、息の下なる遺言に、肌身離さぬ形見の印籠、取り出でゝ妹に渡し、そのまゝ息は絶えにけり。

○加田志津馬は、其折から敵討ちの、願ひ早速に許りたれば、武助が鎌倉より、帰るを待つに暇なく、▲／▲畑川丹右衛門、只一人召し連れて、又五郎が後を追っかけ、播磨の方へ急ぎつゝ、遠近と尋ぬれども、敵のありか絶えて知れず。それより四国・西国を経巡りて、一年余りを旅路に送り、余りに沢井を求めかねて、都の方へ立帰るに、丹右衛門が申すには、「鎌倉の管領、成氏公の侍に、桜江珍左衛門といふ者は、まさしく又五郎が従兄弟なり。しかれば敵は鎌倉に、隠れをる事もあるべし。ことに一家中なる唐木氏とは、婿舅の縁をはすれば、一まど彼の地へ立越えて、唐木氏に身を寄せ給はゞ、便宜の事有べし」と勧めしかば、志津馬はこれに従ひて、鎌倉へ赴き、唐木政右衛門に対面して、去年より中国・西国を、経巡りしに敵のありか、知れざる由をうち嘆き、さて桜江が事を聞くに、政右衛門は、桜江が逐電せし、その為体を物語り、「敵又五郎は覚えある、曲者なるに和殿が腕も、固まらぬ身一つにて、彼を討たんはいと危うし。我も助太刀せんと思へど、和殿の行方を、知らざる故に黙したり。ゆる〳〵逗留して、まづ剣術稽古し給

（12ウ・13オ　二藍の口説き）

へ」とて、志津馬主従を留めおき、日毎に剣術の、極意を伝授したりける。

しかれども政右衛門は、思ふ旨あるによつて、許嫁の浮橋が、桜江に殺されたる、由をば志津馬に知らせず。弟娘の二藍は、その年一つ劣りにて、顔ばせも、よく浮橋に似たれば、すなはち二藍を、浮橋なりとて引合はするに、志津馬は先年都にて、たゞ一度のみならでは、浮橋を見ざりしかば、妹の二藍を浮橋なりと、思ひつゝ日を送るに、許嫁とはいひながら、大望ある身はかりそめにも、みだりがはしき振る舞ひをせず。二藍が愛々しく、もの言ふを気疎く思ひて、いつもつれなくもてなせば、思ひかねてや人目を忍び、娘は志津馬が袂を引きて、恨

あ（二藍）「女だてらに厚かましいと、お蔑みは承知なれど、世界晴れたる私が殿御。世に敵討ちする者は、許嫁の女房でも、一つに寄られぬものかいな。はなれだみの印籠も、一つに合はして給はらば、癪の根を切る気の薬。●／●効道見せて下さりませ。

し（志津馬）「みだりがはしい、これはしたり。おたしなみなされい。

めしげに涙ぐみ、「許嫁しよりはや二年、思ひ寄りなき舅殿、落命によつて祝言せず、ことに 次へ続く （12ウ・13オ）／お行方知れざれば、心にかゝる朝な夕な、慰めかねし形見の印籠、思へば恋の山鳥の、夜は分かれしひとり寝を、不憫とは思さずや。人目を忍び世を憚り、まことの祝言まだせずとも、一つ住まゐにありながら、他人向きなる切り口上、それが男の情かいな。只かりそめの捨て言葉に、女房どもと言ふたとて、咎むる人もあるまいに、つれないわいな」ともつれ寄り、離れがたくぞ見へにける。

志津馬はやがて取つて突き退け、「御身が恨みは理なれども、父の敵を願ふ者は、家を忘れ恩愛を、捨てねば本意は遂げがたし。しばらく時節を待ち給へ」と、様々に説き諭せども、二藍さらに聞分けず、「さまで嫌はせ給ふならば、なほ生憎に付きまつはり、何処までも離れはせず。それを憎しと思ひ給はゞ、早く御身が手に掛けて、殺してたべ」と身を突きつけ、思ひ切るべき気色なければ、志津馬もほとんど持て余し、「許嫁の妻にもせよ、敵討ちの邪魔する女、助け置いては此身の仇。観念あれ」と脅しの刃、引抜けばなほ恐れず、「愛しい殿御の手に掛り、今の思ひをやる瀬があらば、命はさら〳〵惜しからず。早く殺して〳〵」と、覚悟の体に今さらに、抜きたる刀せん方なく、既に討たんと振り上ぐる、襖のあなたに声高く、「あいに相生の松、風さつ〳〵の声ぞ楽しむ一と、主唐木が小謡に、携へ出づる祝儀の嶋台、二人が中へおし直し、「年なは若き婿志津馬、一旦色に迷ふ事あらば、大敵は、打がたしと危ぶみ思へば、秘かに娘に言ひつけ、此方より、仕掛くる恋に心も引かれず、やむ事を得ず手に掛けて、恩愛の絆を切らんと、振り上げたる刀の切れ味、試さずともあつぱれ／〳〵。何か隠さん▲／▲これなるは、まごと和殿へ許嫁し、姉娘浮橋ならず、それが妹の二藍なり。惜しむべし浮橋は、かやう／〳〵の事によつて、桜江珍左衛門が手にかゝり、空しくなりしは去年の事。『せめて妹を娶せて、和殿に力を合はせてたべ』と、今際の遺言黙しがたく、それと明かさで二藍を、浮橋なりと偽りしは、姉が操を立てたさ。行家殿の一周忌も、はや果てたれば二藍と、祝言して給はれかし。こは浮橋が願ひぞ」と、さすがに猛き武士も、子ゆへに脆き涙川、淵瀬と変はる妻定め、志津馬も道理に感じ入、やがて祝言したりける。（13ウ・14オ）

扨も沢井又五郎は、恩ある行家を打殺して、正宗の刀を奪ひ取り、僕束平をば、鎌倉へ遣はして、桜江珍左衛

（13ウ・14オ　政右衛門、本意を明かす）

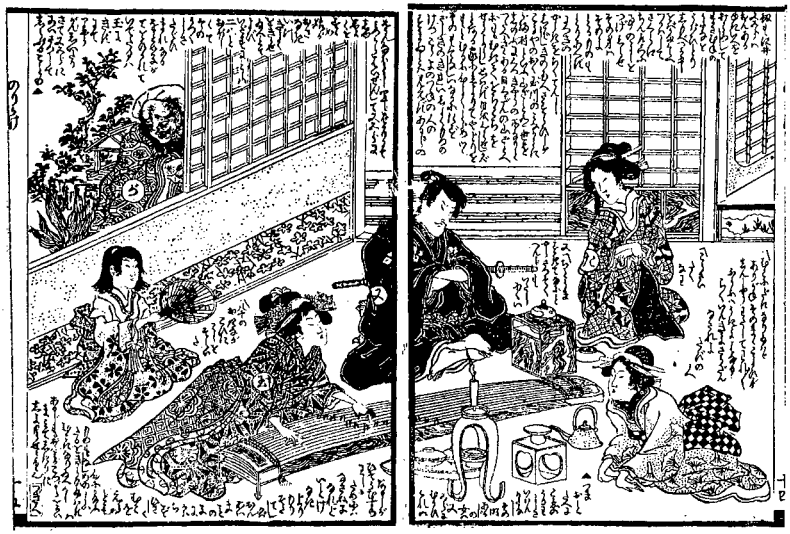
門に、事の由を告げ知らせ、その身はその夜、取る物も取りあへず、仁木の屋敷を逐電し、しばし紀国へさすらひしが、高野の奥、玉川の水上に、蝦蟇村といふ山里有。世を忍ぶに究竟の、所なりと伝へ聞、ある日件の山里へ

政（政右衛門）「今宵祝言調へば、我も逃れぬこの仇討ち。珍左衛門は娘が敵、又二藍には姉の仇。舅の敵は又五郎、女ながらも武士の妻、母のなき子は今さらに、一人鎌倉へは残されず。主君へ暇を乞ひ申して、親子三人すぐに出立。およそ天の覆ふ限り、又地の載する八隅の国々、金輪奈落の底までも、沢井・桜江が、ありかを尋ねて本望遂ぐるは、政右衛門が手裏に有。心安かれ加田志津馬。

志（志津馬）「すりや浮橋は桜江が、為に命を落とせしとな。知らぬ事とて二藍殿、脅しの刃は面目ない。

あ（二藍）「今こそ叶ふ姉様の、願ひはやっぱりこの身の幸ひ。

丹（丹右衛門）「三国一の婿・舅君。智勇も揃ひし嫁御寮。千秋万歳、重畳々々。



（14ウ・15オ　又五郎、婿に望まれる）

赴きて、遠近を逍遥し、思はず日を暮らせしかば、とある家に、立寄りて宿りを求むるに、心よく留めつゝ、そのもてなし田舎に似ず、座敷の綺麗、食物の結構、世の常の、人の住まゐとは見えず。主の女は、年四十ばかりにて、自ら配膳して、又五郎に酒食を勧め、「娘が幼き一曲を、聞かせ給へ」とて呼び出だすに、年は二八と思しくて、その美しさ、類稀なる少女子が、手を引かれて出でたるは、玉に瑕にて両眼しいたり。さて又五郎に挨拶して、調ぶる琴の▲／▲爪音さへに、声の麗しさ言はん方なし。

その時主の女は又五郎に向かひ、「これは主が秘蔵娘、わしが為にはなさぬ子なれど、稚きよりもり育てしかば、

へ後妻栲縄

（栲縄）「婿にだになり給はゞ、有り金そのまゝ今宵より、身上渡して我々夫婦は、浮世離るゝ楽隠居。相談なされよ、旅の人。

又（又五郎）「ちとうま過ぎて何とやら、早速返事もいたしにくい。

（娘）「八十の翁が　恋に腰を反らいた。

▼箏曲「梅が枝」の一節。

恩愛まことの子に変はらず。久しく婿を選めども、心に適ふ者もなし。目のしいたるを嫌ひ給はずは、婿になりて給へかし。主も御身が骨柄を垣間見て、しきりに所望せらるゝ也。次へ（14ウ・15オ）／曲げて此方へとゞまり給へ」と、言葉を尽くして止めけり。

又五郎は「志す方もあれば、明日は一度暇申て、帰るさに又立寄り、その時返事いたすべし」と挨拶し、その明けの朝、件の宿りを立出でしが、「さるにても田舎には、いとも稀なる長者なり。何の見る所ありて、我を婿にせんと言ひしや。狐の業にはあらぬか」と、深く疑ひて行く程に、道のほとりに腰掛け茶屋あれば、その所に立寄りて、主の老女に、昨夜の事を物語るに、老女は笑ふてその故を知らせず、益々疑ひ晴れざれば、様々に言葉を尽くし、「知らせ給へ」と乞ひ問へば、老女少し小声になり、「昨夜御身が泊まりし宿は、蝦蟇村の癩蝦蟇長者と呼ばれて、何不足なき身上なれども、代々癩病の筋ありて、他所より婿に来る人なし。他国の人を婿に取れば、難病の根を切るとて、旅人と見れば宿をして、様々に厚くもてなし、わりなく婿にせんと言ふ也。しかれども、人皆妖しき病に恐れて、三日ともゐず逃げ失せ侍り。▲／▲御身もよき日を食ひ給ひぬ。早く此所を立ち去り給はずは、出口々々を塞がれ、逃れがたし」と囁きけり。（15ウ）

▼管見諸本いずれも改装合綴のため、奥目録等、後表紙の詳細不明。

（又五郎）「それで疑ひがやうやく晴れた。さても危ういい事であった。

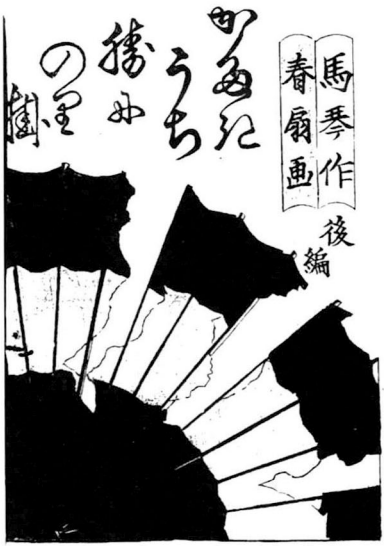
（婆）「わしが口からこんな事、聞いたと言ふて下さりまするな。

馬琴作

（15ウ　又五郎、茶屋の婆から事情を聞く）

曲亭馬琴『敵討勝乗掛』翻刻

《下冊　前表紙・同見返し》



（前表紙）

馬琴作
春扇画

趣向伊賀越

版元和泉屋　敵討勝乗掛　後編　酉春新板

▼描かれるのは又五郎の乳母・ゐのはな婆のように
も思われるが、あるいは本作には登場しない、又
五郎の母鳴見（なるみ）であろうか。悪婆を装って謀反を暴
いた彼女は、『乗掛合羽』の浮世絵では上図と同
様に髪が白く、長刀を持った姿で描かれる。

（見返し）

馬琴作
春扇画　後編
かたきうち勝にのり掛

（巻四）

又五郎は、つく〳〵と思ふやう、一我は敵を持つたれば、世を忍ばんと思ふ折、たとへ癩病ある家なりとも、金銀に事欠ずは、又妙薬も得やすかるべし。何はともあれ、しばし癩蝦蟇が婿となり、世の中安く送りなば、かくの如き旅寝をして、さすらひ歩くに増す方あらん。いかゞはせん」と腹の中に、思案しかねて行く程に、村の出口になりしかば、数多の乞丐むら〳〵と、走り出ておし止め、「婿君を止めよと、おらが長者の仰せを受け、

（16オ　乞丐ら、又五郎を阻む）

曲亭馬琴『敵討勝乗掛』翻刻

先へ回つて待つてゐました。逃ぐるとて逃がしはせぬ。さあ〳〵ござれ」と取り巻けば、又五郎打笑ひ、「あら囂しい蟇蛙。汝ら我を止めずとも、こゝより取つて返す了簡。難病承知の婿入は、金に惚れたる縁結び。いざ供せよ」と先に立ち、癩蝦蟇が屋敷へ帰れば、主嫗、娘玉川、喜ぶ事限りなく、一善は急げ一とその夜すぐさま、婚姻をとり結ばし、三日三夜の酒盛りに、舞ひ歌ひてぞ暮らしける。（16オ）／そも〳〵此蝦蟇村に、難病の多き事は、毒ある玉川の水上にて、人皆毒に触るゝ故なり。

されば沢井又五郎は胆太くも、癩蝦蟇の婿となり、玉川を妻にして、一年余り送りしが、又つく〳〵と思案するに、「久しくこゝに留まらば、我も遂には五体腐れ、命もそこに終はるべし。此家の金銀を奪ひ取つて、逐電せばやと思へども、いまだ金蔵の鍵を、渡さねば心に任せず。主の後妻栲縄は、我に心ありげにて、いやらしき目遣ひすれば、これを手引きに金を盗ませ、走り去らん」と思ひしかば、いつしか栲縄と密通し、事のついでを窺ひしに、都にて奪ひ取つたる、次へ続く（16ウ・17

（乞丐）「今日からこなたもおいらが仲間、旦那の婿がね。祝ふて一つしめようかい。

（16ウ・17オ　又五郎、蛇毒を得る）

オ）／正宗の刀は、腰を離さず秘蔵したれど、穢れたる病ある者は、剣の徳に恐れつゝ、家内に不思議多ければ、目釘を抜き鞘を放ち、庭の大竹を中より切り捨てゝ、竹の内へ隠し置き、人の疑ひを避けたりしに、ある日その青き事、緑青に等しき蛇、叢陰より這ひ出て、する〳〵と竹へ上ると見へしが、蛇の頭ははたと落ちて、手水鉢に入ると等しく、水気たちまち立ちのぼり、軒端に巣をくふ燕の、一度に落ちて死にければ、又五郎きつと見て、「緑の蛇の頭には、大毒ありとかねて聞けり。されば刀の威徳によつて、おのづと落ちし蛇の、頭の毒薬これをもつて、家内の奴ばら皆殺し、思ひのまゝに金銀を、背撓負ふて立ち去らば、後腹病めぬ一期の幸ひ。うまい〳〵」と独り言して、振り向く後ろに栲縄が、様子とつくと立聞て、「あつぱれ妙計、婿の殿。娘といへど玉川は、妾となさぬ継子根性。主諸共片付けて、御身と二人手を引あふて、都へ走り楽々と、一期送らば嬉しかろ」と、一人飲み込む四十女が、恋に心も乱れてや、男

（又五郎）「はからず得たる稀代の毒薬。これをもつて、ヲ、そうだ。

へ蛇の毒に当たりて、燕落ちる。

（17ウ・18オ　又五郎、癩蝦蟇親子に毒を盛る）

も共に毒悪の、毒酒の用意しすましたり。

▼『乗掛合羽』九ツ目にも、正宗を隠した竹に蛇が這い上り、その頭が手水鉢の中に落ちる趣向がある。

かくて又五郎は、主癩蝦蟇に言ふやう、「今日はそれがしが、誕生日にて候へば、心祝ひに神酒は上げたり。玉川もいたゞき給へ」と、土器をさしつくれば、男の酌に心もつかず、父癩蝦蟇と諸共に、件の酒を飲むと等しく、「あつ」と一声叫びつゝ、目口より血を吐きつゝ、空を掴んで死したるは、無残といふも余りあり。

しかして後に又五郎は、家内の下女下男、此日家に、ありし者をば一人々々に、呼び寄せては斬り殺し、いづが（癩蝦蟇）「誕生の神酒といひしは、命を縮むる毒酒であつたか。又五郎の大悪人、思ひ知らせん、待つてるよ。

又（又五郎）「それを俺が知る事か。世の人に、▼

以下、脱文カ】

玉（玉川）「家の難病承知の上、妹背の縁を結ぶとも、嫌なら嫌と言ひはせで、此身ばかりか父様まで、非業の最期も男の悪心。思へば思へば口惜しい。

（18ウ・19オ　又五郎、栲縄を斬殺）

れも面の皮を剥き、さて一人の男の死骸に、我が衣服を着せ、他所より盗人の、入たる体にこしらへて、金蔵の金銀を、背負はるゝだけこれを負ひ、栲縄にも背負はせて、蝦蟇村を走り出で、都の方へ走りけり。

○かくて又五郎は、癩蝦蟇長者が蓄への金銀を、悉く奪ひ取り、栲縄を伴ふて、蝦蟇村を走り出で、行く事わづかに、二三里にして日は暮れたり。しかもこの時宵闇に

〈栲縄が血潮、又五郎が顔へかゝり、これより遂に癩病となる。

（又五郎）「色から仕掛けてうまくしおほせ、連れて逃げるをまことゝして、百年も、添はふと思ふは大たわけ。如是畜生発菩提心。南無阿弥法蓮陀仏、フハ、、、、これでよしよし。

（左上。又五郎、武介を欺く）

〈玉石武介は、志津馬が後を慕いつゝ、巡礼の修行者に身をやつし、観音堂に通夜せし夜、敵又五郎と知らず、謀られて栲縄が首を施物に受け取る。又一宿願あつて寸志の布施物。大悲の示現に任すれば、受け納めておくりやれさ。

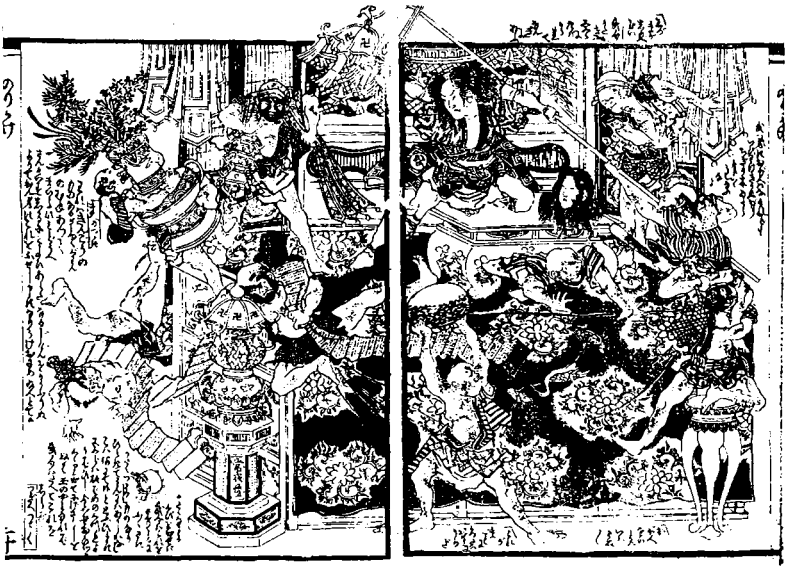
（武介）「大悲の示現と宣へば、辞退申も何とやら。

て、足の踏み所も定かならず。又五郎思ふやう、「我かりそめに、栲縄を誘ひしは、[次へ続く](17ウ・18オ)／たやすく金を奪んためなり。今すでに事成りて、これを何処までか伴ふべき。もし追つ手の者出で来らば、たちまち足手まとひとなりて、進退も心に任せず、おめ〳〵と虜にならば、後悔そこに立がたし。後の禍を払ふにしかず」と、心の内に目論みつゝ、草鞋の紐を、結び添ゆるやうにして、少し後へ引下がり、後ろに立ちてだんびらを、ひらりと抜いて栲縄が、首をはつしと打落とせば、たちまちさつとほとばしる、血潮又五郎が顔へかゝるを、手拭ひもて拭ひ取るに、▲／▲痒き事限りなく、粟立ち腫れたるやうなれど、これらをば事ともせず、栲縄が骸をば、かたへの川へ転ばし入、首をも捨てんと引たつるに、我が顔ます〳〵痒くなりて、手を放しがたし。「こはいかに」と怪しみつゝ、栲縄が袖を引千切り、首を包みて腰に着くれば、顔の痒み忘るゝがごとし。「さては此女かくなりても、我に執念を残せしか。●／●もししからずは、葬りを願ふなるべし。せん術あり」と一人頷き、向かひをつく〴〵透かし見れば、森の中に古き御堂あり。歩み近付きてよく見るに、観音堂にてありければ、「今宵はこゝに明かさん」とて、内陣へ進み入、金と首とをかたへに置きて、夜の明くるを待つ程に、回国の修行者と思しきが、■／■御堂の縁に尻をかけ、「今宵はこゝに通夜せん」とて、来し方の事なんど、独り言するを聞くに、こは紛ふべくもあらぬ、加田志津馬が若党、玉石武介なり。

▼『乗掛合羽』八ツ目では、又五郎が医師の左内を殺して薬を奪い、意図的に人相を改める。その際に、又五郎は左内の面の皮を剥ぐ。

されば武介は、去年鎌倉へ使ひして、都へ走り帰りしが、「志津馬ははや、敵討ちの願ひ叶ひて、丹右衛門を伴ひつゝ、旅路の空に赴きぬ」と聞こえしかば、武介もやがて都を出でゝ、播磨路を志し、主の後を、慕へども遂に得会はず、路用もすでに尽きたれば、詮方なく西国巡礼の、修行者にいでたち、札所々々を巡礼して、この頃紀州を遍歴し、今宵も同じ野宿なるに、観音堂に通夜せんとて、此所へは憩ひしなり。

かくて又五郎は、武介が来し方行く末を、独り言するをとつくと立ち聞、「奴は去年いのはなにて、我が乳母を殺せし由、その頃風の便りに聞ぬ。こゝで会ふこそ幸ひなれ。乳母が恨みを報はん」とて、刀に手はかけたるが、「いや〳〵我、此首を携へたるに、夜明けて人に怪



（19ウ・20オ　武介、乞丐らに襲われる）

しめられなば、言ひ分くるに難しかるべし。武介を謀りてこの首を抱かせ、蝦蟇村の奴原に疑はせて、彼の輩の手を借りて、武介を討ち殺させなば、恨みを返すのみならず、我が為には大きなる、禍を払ふなり。しかせん物を」と一人頷き、さて内陣より声をかけて、「修行者そこに来たり給ひしか。[次へ続く]（18ウ・19オ）／我は近郷の者なるが、宿願の旨あつて、毎夜此御堂へ参詣す。しかるに今宵、あらたなる示現をかうぶりぬ。よりて御身に、これを布施し申すなり。受け納め給へ」とて、▲／▲栲縄が首を出せば、武介はこれを探りみるに、袱紗に固く包みし物なり。「開きて見んに灯しはなし。こは何にて候」と問ふひまに、又五郎は板羽目の崩れより、奪ひし金を背負ひつゝ、潜り出て逃げ去りしを、射干玉の闇なれば、武介は絶へてこれを知らず。[次へ続く]（19

〈志津馬が僕玉石武介、敵又五郎に謀られて難義にあふ。【▼欄上】

武（武介）「身に覚へはなけれども、言ひ訳聞かぬ棒千切り木。あたら命を失ふなよ。

（乞丐）「覚へないとは言はさぬ〳〵。

（乞丐）「これがまことに乞丐に棒打ちだ。

ウ・20オ）／只今物を取らせたる、施主を敵の又五郎なるべしとは思ひもよらず、「こは全く、観音大師の利益にて、路用を与へ給ふにこそ」と、思へばその人消え失せしを、なか〳〵に疑はず、やうやく横雲引渡し、東の方白むまゝ、又かの袱紗の物を見れば、縫箔したる片袖にて、夥しく血潮着きたり。「こはいかに」と驚きて、忙はしく開き見れば、生々しき女の首なり。余りの事に呆れ果て、呆然たる折しもあれ、癩蝦蟇が手下の里人、一主の敵を捕らへん一とて、此所まで尋ね来て、只今武

（20ウ　武介、切腹する）

曲亭馬琴『敵討勝乗掛』翻刻

介が観音堂にて、栲縄が首を前に置き、呆れたる体を見て、▲／▲一さては昨夜の強盗は、この回国に極まったり。汝六つの臂あつて、主癩蝦蟇、婿の沢井又五郎、息女玉川、その余の男女を害し、面の皮を剥き捨てゝ、数多の金を盗み取るとも、かく大勢にて取り巻きたれば、とても逃れぬ天の網。それなる首は主の後妻、栲縄どのゝしるしなれば、正しき証拠、長者の敵、逃さじやらじ」と打ってかゝれば、武介はます〳〵驚きて、事の由を告げんにも、事急なれば是非なくも、仕込み杖を引抜きて、多勢を相手に戦ひしが、その身金鉄にあらざれば、次第々々に深手を負ひ、「なまじいに生け捕られて、死に恥をさらさんよりは一と、覚悟を極め気を励まして、追つ手の者どもを斬り散らし、墓原へ走り入て、腹十文字にかき切りつゝ、やがて空しくなりにけり。下衆に稀なる忠臣も、宿世悪くて敵にはかられ、科なき科に死する事、哀れといふも愚かなるべし。（20ウ）

〈武介が魂、主を慕ひて中有にさまよふ。

【▼欄上】

（巻五）

唐木政右衛門はその身のために、志津馬は弟子なり婿なるに、彼に一臂の力を添えて、▼／▼敵又五郎を討たせずは、男といはるゝ甲斐なしとて、事の趣を、管領成氏へ訴へつゝ、身の暇を賜はり、娘二藍を伴ふて、鎌倉を引払ひ、志津馬諸共京へ上りて、敵のありかを詮索するに、売卜のいふ所、南にありと教へしかば、皆々奈良へ赴く程に、宇治の歌姫のほとりにて、俄雨に道さりあへず、畑川丹右衛門は、二藍の供して●／●走るに、女の足の甲斐なくて、志津馬・政右衛門らに後れしが、雨はます〳〵降り注げば、しばし木陰に休らひて、雨の晴れ間を待つ程に、［次へ続く］（21オ）／主従しきりに眠気つきて、思はずまどろみたる夢に、玉石武助忽然と来りて、その身紀州にて、又五郎に謀られ、無実の科に、命を落とせし由を告げ、「奈良に逗留し給はゞ、自然と敵に会ふ事あらん」と、まざ〳〵と告ぐると見て、夢はたちまち醒めにけり。

（21オ　二藍・丹右衛門、武介を夢に見る）

○こゝに又桜江珍左衛門は、去年鎌倉を立退きて、束平諸共又五郎が、行方を尋ぬるに絶えて会はず、それより信濃路へたち帰りて、所縁を求め木曽左馬介義元に、奉公してありけるが、ある時彼の正宗の刀の事を、主君義元に申せしかば、義元ことさらに珍重し、「汝いかにもして、その又五郎とやらんを尋ね出だし、今に正宗を所持いたすにおいては、召し連れ参るべし。刀をだに我に得させば、よきに召し抱へつかはすべし」とて、路銀数多給はりしかば、珍左衛門大に喜び、束平を召し連れて都へ赴き、こゝにてより〳〵、沢井が行方を尋ぬるに、「奈良の方にあり」と告ぐる者あれば、これも南都を、心ざして急ぐ折から、道にて志津馬・政右衛門に出あひぬ。桜江大に辟易して、束平諸共後をも見ず、足に任せ

（21ウ・22オ　又五郎、政右衛門らと遭遇）

て逃げ走るを、政右衛門・志津馬等は、珍左衛門と見てければ、逃さじと追つかくる、折しも沢井又五郎は、たやすく蝦蟇村の難義を逃れ、いさゝか志す所あれば、これも奈良へと赴くに、いつぞや栲縄が、血潮顔へかゝりしより、一面に腫物となり、眉毛抜け鼻歪み、相貌全て変はりし故、かへつて世の中広く覚えて、悠々として行く道にて、珍左衛門・東平は、息もつきあへず逃げ来り、又五郎を見てそれとも知らず、「人に追はれて難義の者なり。次へ続く」（21ウ・22オ）／御浪人と見受け申したり。しばし隠して給はれ」と、余儀なく頼めば又五郎は、心の内におかしくて、「我は沢井又五郎なり」と、告げんとは思ひながら、事急なれば名乗るに及ばず、快く請

志（志津馬）「お隠しなさるな御浪人。子細あつて尋ぬる侍、主従共に稲束の、内に隠れておらふがの。

（政右衛門）「大事の前のもの争ひ、志津馬急きやんな、まあ〳〵待ちやれさ。

又（又五郎）「拙者とても武士の片端。刀に賭けて虚言は申さぬ。余り御念が入過ぎる。無益の所暇入ずと、早く外をお尋ねなされい。

（22ウ・23オ　志津馬、奈良で眼病を病む）

け合ひて、やがて桜江・束平らを、稲塚の内に隠しけり。

程なく志津馬・政右衛門らは、珍左衛門を追つかけ来りて、稲塚の内を尋ねんとするを、又五郎おし止め、「それがし先より此所に、あめ【▼「あし（足）」の誤カ】を休めて候ひしが、さやうの人は決して来らず。脇道へ逃げたるなるべし。外を尋ね給へ」と言ふ、面体格好、声音まで、みな悉く変はりしかば、唐木も志津馬も▲／▲此癩病を、又五郎ならんとは思ひも寄らず、これかれの問答に暇いりて、桜江をとり逃がしけり。

（志津馬）「鹿を得がたき奈良へ来て、薬に事欠く身の薄命。

あ（二藍）「気を揉ましやんすはお身の毒。得がたい薬も談合して、調ふ事もござんせう。

（政右衛門）「世には様々の難病も、あるものでござる。その浪人は、いつぞや木津にて出で会ふた、旅人じや有まいか、ノウ志津馬。

で（伝茂庵）「虚談は申さぬ、請け合療治。薬は只今進上いたす。かの一品を調へなされや。

へ丹右衛門、伝茂庵が物語の妙薬、我が生れ年によく合へば、思はず驚く。

▼『乗掛合羽』八ツ目でも、政右衛門は相好の変わった又五郎を見逃している。

○政右衛門・志津馬は、又五郎に計られて、珍左衛門を取り逃がし、無念の歯噛みをなす折から、二藍・丹右衛門も、後を慕ふて急ぎ来り、まざ〳〵しく夢に見たる、武助が落命の事を物語れば、唐木も志津馬も玉石が、忠義をいとゞ憐れみて、やうやくに怒りを収め、「珍左衛門、この辺を【次へ続く】（22ウ・23オ）／【前の続き】徘徊すれば、又五郎も、決して奈良にをるなるべし。まづ〳〵奈良へ急がん」とて、主従四人南都へ赴き、旅籠屋に宿取りて、忍び〳〵に、敵の行方を尋ぬる程に、志津馬はふと眼病をうれひて、昼だも物を見る事かなはず。政右衛門大に驚き、「かくては只今敵に会ふとも、本望を遂ぐる事叶ふべからず。良医やある、妙薬やある」とて、心の及ばん程は、金銭を厭はず、療治を加え二藍も、昼夜傍らを離れず看病す。しかるにあの井伝茂庵【▼『乗掛合羽』九ツ目の石森鶏庵】といふ目医者、志津馬が容体を考へ、「この眼病世の常の、療治にては平癒しがたし。それがし家伝の妙薬有、これに牡鹿の生き肝を加えて服薬あらば、たちどころにして夜の明くるがごとし。しかれども、鹿は春日の遣はしめとて、奈良にて鹿を殺す者は、人を殺せし法をもって、その罪に行はる。これによりて、薬種調ひがたし。例へば近頃それがしが療治いたす、浪人の癩病のごとし。これには卯の年卯の月、卯の日卯の刻に生れし人の、心の臓の精血を、加えて用ゆる妙薬あれども、薬調ひがたくて、療治はかどり申さず」と物語りぬ。

○又五郎は去んぬる頃、木津の宿外れにて、珍左衛門・束平を救ひにけれど、我が面体の▲／▲変はりし故、桜江らはそれとも知らず、又五郎が、志津馬と政右衛門に問答するうちに、桜江も束平も、田の畔をめぐりつゝ、はや遠く逃げ失せしかば、又五郎も、彼らに名乗りあはざるを、本意なくは思ひながら、「目の当たり唐木も志津馬も、我を見違へし上は、何の憚る事あらん」とて、諸共に奈良へ赴き、金に任せて、木辻の廓に美女を集め、たゞ淫楽を事として、日を送るにも身の難病を、疎ましく思ひ、【次へ続く】（23ウ・24オ）／「この病を癒す医者あらば、薬礼望みに任せん」と、言ひふらしけるに、志津馬が眼病の療治する、あの井伝茂庵伝へ聞て、又五郎が旅宿に至り、「その病には卯の年月日時に、生まれし男の心の臓を、酒にて飲み給はゞたちどころに、元のごとくなるべし」と、教えける事のついでに、志津馬が眼

（23ウ・24オ　又五郎、伝茂庵を殺害）

病の容体、療治の仕方など物語り、誇り散らして帰りける。又五郎これを聞て、「かの医者志津馬が療治して、本復させたらんには、たちまち我が身の禍となるべし。我が病気の妙薬、既に聞すましたれば、奴に用なし。殺して後の禍を、払はんには」とてすぐさま追つかけ、春日の社のほとりにて、ついに伝茂庵を絞め殺す折、束平は春日へ参詣し、此所へ来かゝり、此体を見て驚くを、又五郎秘かに招き寄せ、「我は又五郎なり」と名乗り、ありし事ども物語れば、束平再び驚きける。

▼原作『乗掛合羽』では、又五郎が俗医者左内を殺して相好の変わる薬を奪う。

又（又五郎）「束平驚く事なかれ。身の仇となる此藪医者、おつ片付けるそれがしは、そちが主の又五郎じゃ。かくまで相好変はりしぞ。眼を定めてとつくと見よ。

（伝茂庵）「ダア引〳〵。

（束平）「さてはあなたは、奴めがお旦那、又五郎様でござりまするか。いつぞや木津にて危うい所を、お救ひなされて下されたも、ほんにやつぱり主であつたに、知らぬ事とてこれはしたり。

（24ウ・25オ　大鹿、又五郎の密書を持ち走る）

その時束平は珍左衛門が、信濃の木曽義元の家臣となりし事、此度正宗の刀の事につきて、又五郎に会はんとて、そのありかを尋ね、珍左衛門、今は五条の旅籠屋に隠れゐて、唐木が矛先を、避くる由を物語れば、又五郎大きに喜び、「我此所へ来りし日より、野伏りの溢れ者に金を取らせて、まさかの時の助けとしたれば、志津馬・唐木らを恐るゝに足らず。これより伊賀の山越えして、伊勢参宮し、鳥羽の港より、船に乗りて三河へ至り、それより信濃へ赴くべし。珍左衛門にはそれの日に、云云の所に出でゝ、待ち給へと言付けよ」とて、矢立てを取り出だしてさら〳〵と、一通を書き認め、これを束平に渡しつゝ、遂に別れて立去りける。

折しも畑川丹右衛門は、志津馬が眼病平癒の祈願として、春日へ参詣し、返り申しに図らずも、束平に出で会ひしが、彼が手に持つ書状の上書き、「珍左衛門殿、又五郎」と記したれば、奪ひ取らんと争ひつゝ、組んづほぐれ

丹（丹右衛門）「南無三宝大切なる、密書を鹿に取られたかホイ。

束（束平）「よい所へ鹿が来た。逃げながら早く食ってしまへ。頼んだぞ〳〵。

つ半刻ばかり、命限りに●／●戦へば、束平は「大事の密書、奪れてはかなはじ」とて、草むらへ投げ入るゝに、大鹿一匹［次へ］（24ウ・25オ）／走り来て、件の密書を引咥え、一散に駆け出す。「南無三宝」と丹右衛門は、驚きながら束平を、唐竹割りに斬り倒し、密書を取らんと逸足出だして、鹿を追ふてぞ走り行く。

○畑川丹右衛門は、束平を斬り殺し、件の鹿を追つかけて、やうやくに引捕らへしが、鹿はたゞ一飲みに、密書を食らひ終はりけり。丹右衛門ます〳〵怒りて、やがて刀を取り直し、鹿をぐさと刺し殺し、手早く腹を断ち割りて、飲んだる密書を引出だし、破れぬやうにおし開き、始めより終はりまで、とつくと見て打頷き、「密書を奪ひ返さん為に、所の掟を犯せしかば、兼ねて聞く志津馬様の、眼病の大妙薬、図らずも手に入りたり。辱し」と傷口へ、手をさし入て小牡鹿の、胆を難なく引出だし、立ち去らんとする折から、法螺貝の音四方に聞こえ、「鹿を殺せし大罪人、搦め捕れ」と呼ばゝる声に、はつと驚く一生懸命、「一旦囲みを斬り抜けん」と、のつたる血刀引提げて、辺りを睨んで立たりける。（25ウ）

（25ウ　丹右衛門、密書を手に入れる）

▼『乗掛合羽』では、石留武助が密書を飲み込み（八ツ目）、のちに正宗の刀で切腹して書状を取り出す（九ツ目）。また、志津馬の眼病を癒すのは、政右衛門の一子巳之助の生血（九ツ目）。

（丹右衛門）一さては敵又五郎は、癩病にて相好変はり、木辻にをるか、嬉しや〳〵。

口上

〈馬琴画賛の扇取次所、江戸神田鍋丁柏屋半蔵、大坂心斎橋筋河内屋太助方にあり。宿元へ、仰こさるゝより近道なり。

（巻十八）

かくて畑川丹右衛門は、やうやく囲みを切抜けて、志津馬が旅宿に走り帰り、束平を殺せし事、密書を鹿についばみ去られ、已む事を得ず鹿を殺して、又五郎が書状を取り得たる、由を志津馬、唐木らに物語り、小牡鹿の生き肝を、やがて志津馬に進めしかば、薬に加えてこれを飲むに、志津馬が眼病たちまち癒えて、両眼明らかになりしかば、丹右衛門大に喜び、刀を抜いて我と我が、腹一文字にかきさばき、「それがし既に、春日の鹿を殺したれば、その罪とても逃れがたし。幸いなるかなそれがしは、卯の年卯の月卯の日、卯の刻に生れし者なり。この心臓をもつて、敵をもとの又五郎となし、本望を遂げ給へ。我が一命を捨つる故に、今三つの幸いあり。武助もさこそ●／●待ちわびぬらん。お暇申す」と言ひも果てず、やがてむなしくなりにけり。（26オ）

沢井又五郎は束平が、討たれたる事を知らず、「既に近日出立の事を、桜江へ申遣はしたれば、奈良もしばしの名残りなり。三日三夜の酒盛りせん」とて、名ある芸子を数多呼び集め、金銀を撒き散らして、遊び戯れ昼夜を分かたず。

されば志津馬・政右衛門は、丹右衛門が忠死によって、志津馬が眼病平復し、あまつさへ、敵又五郎が行方も知

（26オ　丹右衛門、切腹して果てる）

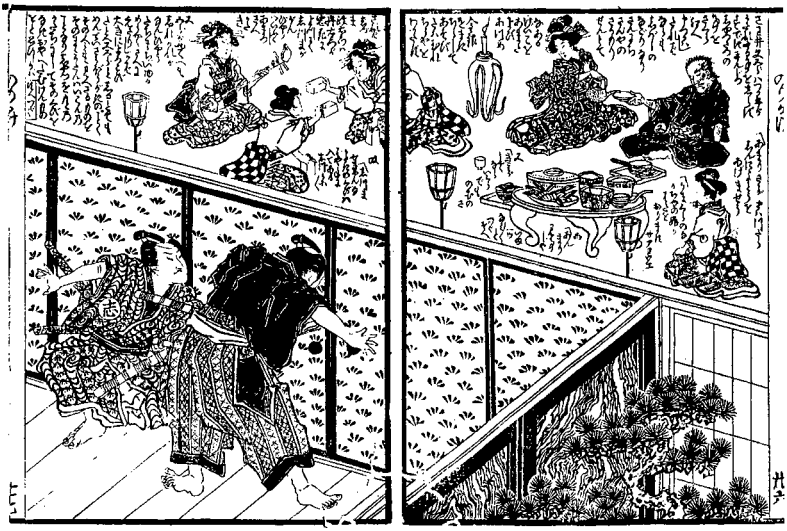
曲亭馬琴『敵討勝乗掛』翻刻

丹（丹右衛門）「お役に立つた拙者が命。草葉の陰から本望を、遂げ給ふ日を待つてをります。

（政右衛門）「でかした畑川、あつぱれ／＼。

あ（二藍）「不憫の最期、南無阿弥陀仏。

志（志津馬）「相好変はりし又五郎、そのまゝ討たんは本意にあらず。とはいえあたら忠臣を、見殺しにするが残念なはやい。



（26ウ・27オ　又五郎、大いに酒宴する）

れ、彼が難病、たちまち癒ゆる妙薬さへに、得たりしかば大きに喜び、「たとへ又五郎と知るとても、面体相貌餓鬼のごとく、その人とも見へざる者を、そのまゝ討たんは遺恨の事なり。奴をもとのかたちにして、その首を亡き親へ、手向けんものを」と思ひしかば、次へ続く

（26ウ・27オ）／二藍を芸子に仕立て、畑川が、心の臓を漬したる、酒を持たして木辻の揚屋へ遣はし、唐木と志津馬は身をやつして、事の様子を窺ひけり。

▼『乗掛合羽』七ツ目では、主君誉田内記の不興を買うために、政右衛門が木辻で遊興に耽る。

もとより二藍は器量よに優れ、糸竹の技に妙なりけれ

（芸子）「あんまり酒が回つたら、神女湯をあげませう。

（芸子）「鎌倉の、なかちゆの娘が機を織ります、サアヨウエ。

あ（二藍）「あんまり見事じや。今一つ、なみ〳〵と注ぐぞへ。

又（又五郎）「君が酌なら、いくらでも飲むのさ。

政（政右衛門）「志津馬急きやんな、敵の首は、はや手に入てある。静かに〳〵。

ば、又五郎は、新芸子と聞て早速呼び入、さしつおさへつ酒盛りに、現を抜かせし折なれば、二藍がもたらしたる、酒を何の心も付かず、沢井はこれを、引うけ〳〵飲む程に、しばらくして「うん」と叫びて、仰け様に倒れしかば、ありあふ者ども大きに驚き、薬よ水よとたち騒ぎ、様々介抱したりける。

○又五郎はしばらくして、忽然として心気定まり、むつくと起きればこはいかに、眉毛黒髪長やかに、面部の腫物は拭ふがごとく、色白く髭青く、相貌昔に変はらねば、人々奇異の思ひをなし、「これは〳〵」と怪しむにぞ、又五郎は芸子が持つたる、懐中鏡を手早く取つて、我が顔をつく〴〵と、打まもり〳〵、横手を打つて驚く折、志津馬・政右衛門は物陰より、進み入て引挟み、「珍しや沢井又五郎。畑川丹右衛門が忠死によつて、今こそあらはす化けの皮。汝が僕束平は、丹右衛門に討たれたり。倶不戴天の父の仇、尋常に勝負せよ」と、詰め寄り詰め寄る傍には、二藍も懐剣引き抜き、「舅の敵」と詰め寄せて、討たんとするを又五郎は、「物々しや」とかいくゞり、庭の空井へ躍り入り、行方も知れずなりにけり。

○さる程に志津馬・政右衛門は、敵の後を慕ひつゝ、奈良よりは二里が程なる、賀茂を過ぎて笠置にかゝり、大川原、志麻川原、三本松のほとりにて、敵の様子を窺ふに、又五郎は、珍左衛門諸共に、野伏り数多従へて、これも三本松に宿取りぬ。こゝより伊賀の、上野へは二里に足らず。彼処は足場よろしければ、敵討ちは明日未明と定め、志津馬・唐木、その明け方に上野に至りて、又五郎が出で来るを、今や遅しと待ち受けたり。

（27ウ・28オ）

（27ウ・28オ　政右衛門、又五郎を取り逃がす）

（志津馬）「さては井筒に抜け道あつて、取り逃がしたか、残念な。

（政右衛門）「一旦こゝを逃ぐるとも、行く先知れし伊賀の山越。後追つかけん、いざふれ志津馬。

（左上）

○又五郎、木辻に逗留のうち、井戸掘りに金を与へ、秘かに抜け道を作りおきしかば、件の井筒へ飛び入て、志津馬・唐木が鉾先を逃れ、遥か人遠き所へ出づれば、図らずも桜江に出で会ひ、すぐに連れ立ちて伊賀路へ赴く。

（珍左衛門）「昔に変はらぬ貴殿の面体。さて〳〵物怪の幸ひでござる。

（又五郎）「手なづけおきたる、溢れ者を供に連れ、伊賀越えをして、伊勢へ赴き船路をゆかん、いざ〳〵ござれ。

（27ウ・28オ）

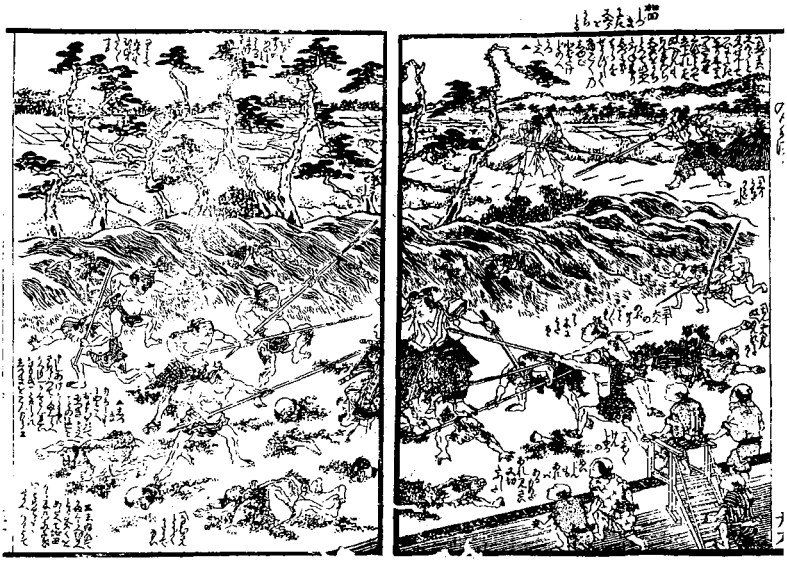
（28ウ・29オ　又五郎、上野へさしかかる）

〻又五郎は大勢の、溢れ者を供に連れ、その身は桜江と共に、乗り掛けに安座して、朝日もすでにのぼる頃、伊賀の上野にさしかゝる。

〻箱根八里はナアヨエ、馬でもコウすがナアヨエ。

政（政右衛門）「志津馬は余人に目をかけず、又五郎を討ち取れよ。桜江はじめその余の奴ばら、政右衛門が受け取ったぞ。

（28ウ・29オ）



（29ウ・30オ　伊賀上野の仇討ち）

加田志津馬、敵（かたき）又五郎を討ち取る。【▼欄上】

（又五郎）「返り討ちだ、覚悟しろ。

〈珍左衛門、政右衛門に討たるゝ。

〈三十六人の野伏（のぶせ）り、悉（ことく）く唐木に討たるゝ。

（見物）「さて／＼剣術の名人もあればあるものだ。

あれ見さい、又切倒した。

（見物）どちらも槍の名人と見へる。負けるな／＼。

（見物）「ア、見てゐても胸がだく／＼する。

（野伏）「南無三とう／＼片腕ない。

〈志津馬は又五郎と血戦して、ついに敵（かたき）を槍下に突き伏せ、首を取って立上れば、政右衛門も珍左衛門ら、大勢を討ち取って、此所へ尋ね来り、志津馬が手柄を賞美して、当国の守護、北畠殿へ訴へ、▲／▲志津馬もろとも都へ赴きて、仁木殿へ事の由を申し上げ、唐木は先立って鎌倉へ帰りしが、管領成氏ことさらに、志津馬を懇望（こんもう）▼▲／▼▲し給ひて、鎌倉へ迎へ取り、大禄を与へて、加田・唐木の両家、いとめでたく栄へけるとぞ。

（29ウ・30オ）

天運循環して、行きて帰らずといふ事なし。されば加田志津馬は、若党に武介・丹右衛門の忠臣あり、舅に唐木の義勇有。妻に二藍の妻女あり、あまつさへ足利殿の一族、管領成氏公を主君として、忠孝の名ます〳〵世に高く、伊賀越の敵討ちとて、今に武勇をとゞめける。いともめでたき事ども なり。

曲亭馬琴『敵討勝乗掛』翻刻

(30ウ)

▼以下広告▼

〔本方極品〕奇応丸　一包弐朱、小包一匁五分同五分
一粒六分づゝ
製法に薬種の価を厭はず、効能百倍、こゝろみて知り給ふべし。

〔血の道妙薬〕神女湯　一包代百銅
〔婦人諸病の良方。能書に詳し〕
右は作者家伝の神方なるを、ある人の勧めに任せ、猿が人真似とは思ひながら、この度売り広め申候。
飯田町中坂下、四方味噌店の向かふに屋根看板有。
滝沢と御尋ね可被下候。　(30ウ)

春のはじめのめでたき物多かる中にまづ
水仙と椿を屠蘇の肴にて
　　葱に鮪の秋はものかは　簑笠
(政右衛門)一吉例変はらず、めでたし〳〵。
曲亭馬琴作　勝川春扇画

《後表紙封面》

▼奥目録「文化十癸酉新版絵双紙目録」。国会図書館所蔵の半紙本による。底本や慶大本は、右の目録を欠く。本作は二番目に掲出される。